

RE START

太田哲也の10年

[連載7回]

TEXT●中三川大地(Daichi Nakamigawa)

PHOTO●田中秀宣(Hidenobu Tanaka)

KEEP ON RACING

真

っ赤なレーシングスーツをピシッと着こなし、小脇にヘルメットを抱える。背、胸を張って颯爽と歩き、声をかけると元氣な挨拶が返ってくる。声には張りがあり、質問を受ければ親身になって紳士的に応える。「冗談を言い合う姿も楽しそうだ。少なくとも疲れ切った顔で満員電車に揺られているような、一般的なオヤジ像はそこにはない。

TRC (TEZZOレーサーズクラブ)、通称「太田哲也とオヤジレーサーズ」。太田哲也の主宰するこのクラブは実にユニークだ。その名が示す通り、40歳以上のいわゆる、オヤジたちのレーサーズクラブである。正確には女性もいるし、40歳以下でも参加は認められている。募集要項には「モータースポーツ文化の発展・振興のため、または明るい社会をつくるため、チャレンジする姿を若い世代に示し、若者に向けて、KEEP ON RACINGの精神を伝えること」と記されている。

一般的なカークラブ、あるいはレーシングクラブとはまったく違うこうした概念は、いったい何を意味するのか。

話は約10年前に遡る。太田哲也は当時、あの事故からの社会復帰を目指して、チャレンジを続けていた。



チャレンジの魅力。

「KEEP CHALLENGING FOR LIFE」の志を持った40歳以上を限定としたレーシングクラブ。それが通称「太田哲也とオヤジレーサーズ」、正式名称「TEZZO RACERS CLUB」である。現在は40歳以下の青年や女性も参加するようになって約60名もの大所帯と成長した。このクラブの目指すものはなにか？活動に徹底する太田の考えに、いま一度迫る。

そのひとつがレースへの復帰だった。アルファチャレンジへの挑戦を持って、彼はレースへと戻ってきたのである。

「最初はたかだか草レースだと思っていたんだ。だけど、俺自身の当時の身体の状態、あるいは気持ちからすれば、レースへ復帰するということは相当な挑戦だった。それこそ、ル・マン24時間レースで360km/hで走ると、チャレンジの度合いでいったら同じだと思った」

そのチャレンジを克服して今の太田がある。と同時に彼は自らのそうした経験を、何かに活かしたいと思い始めていく。キッカケは女子高校生からサインを求められたことだった。「リハビリも進みレースに復帰し始めた頃、高校から講演依頼を多く受け、高校生と話す機会が増えた。そうしたらサインと一緒に写真を撮るのをせがまれたり、やたらとモテたんだよね。なぜ、モテるんだろう？今の子供は、親を始め大人たちのチャレンジする姿、格好いい姿を見る機会がないんじゃないか、と思った。家ではいつも仕事で疲れてクタクタで、休日はミニバンを転がして家族のために尽くす。確かにいいお父さんなのは間違いない。だけど、自分もそうなりたいとは思わなくなっているんじゃないか。もっと大人たちが格好良くなって、子供たちの憧れになってもらいたい。それが夢なんだよね。あのときは、チャレンジしていた自分の姿が、彼らには格好良く映ったんだよ」

講演活動と言えば太田は、同時期にこんな経験もしていた。

「目を輝かせてフェラーリやアルファロメオの質問をぶつけてくる子供が、家にあるミニバンの車種を知らなかったなんてこともあった。また、社会人向けの講演で、俺はミニバン

“太田哲也とオヤジレーサーズ”の面々

真っ赤なレーシングスーツに身を包んだ40歳以上の大人たち。TRCに入会した動機は人それぞれでサーキット未経験者が多かったが、太田氏の前向きな姿勢と理論的なレクチャーに支えられグングンと腕を上げた。



TRCはアルファチャレンジ東北シリーズを舞台にし、太田氏自身もかつてそこに参戦していたことでメンバーにはアルファ乗りが多い。ピットでのマナーや、走行に向けての準備は完璧だ。レースでは自分たちで食事を用意したりアットホームなムードが溢れている。



には絶対に乗りません。」と言ったら拍手喝采が起きたんだ。結局さ、ミニバンって部屋の延長なわけだよ。お父さんはその快適な空間を移動させてくれるだけ。優しいお父さんというところは理解してくれれば、じゃあ将来そうなりたいたいかといったら首を横に振る。子供たちは世のお

父さんたちが良かれと思ってやる姿に未来の自分を投影させ、逆に大人になることに失望している」

太田自身が子供の頃は、同じ世代の子供たちがそうだったように、大人は憧れだったという。ミニバンやエコカーに代表される昨今の自動車社会は「子供のため社会のため」という目的があるけれど、それが逆に子供たちの夢を奪っていることになると、思い至ったのだという。

だからこそその「オヤジレーサーズ」である。40歳というのは初老と言われる。人生の分岐点であり、ひとつの区切りだ。ここで老人へ向かってただ坂を転げ落ちるのか、もう一度青春を取り戻すか。青春とはチャレンジだ。それは本人の心がけ次第。だからこそ40歳以上のオヤジたちに向けたレーサーズクラブをつくり、チャレンジの大切さを伝えたい。それが結果として、次を担う子供たちの世代のモチベーションと夢にもつながる。太田はそう思ったのである。

レーシングスーツを始めチームウェアを赤に統一したのも、年を取るとつい地味な色合いにいきがちなのを是正するため。格好いい大人に見られるには、赤のような原色を着こなさないと駄目、そして「赤は開い

の色」という配慮である。

太田の意見に賛同して集まった人たちは少なくなかった。皆、サーキットは未経験だった。クルマは好きだが「この年になってサーキットやレースなんて」と敷居の高さを感じていた人も多かったらしい。太田の著書に共感を覚える人もいた。

活動の主軸はアルファチャレンジ東北シリーズへのレース出場や、ドライビングレッスン参加である。だが、アルファロメオに限定したくないと、昨年からはスパタイGP（スパ・アタックタイムアタックGP）なるタイムアタック競技を主宰して走る場を設け、ミーティングを行って親睦を深めてきた。

先日、8月26日に袖ヶ浦フォレストレースウェイで開催されたサーキットミーティングでは8名のメンバーが集った。皆が目標意識を持ち、マナーが確立されていたのが印象深かった。走行前に荷物を降ろし、テッピングや点検に余念がない一連の動作は、流れるようにスムーズで見ていて気持ちがいい。走行が終わればすぐさまボンネットを開けてエンジンルームを確認し、タイヤをチェックする。確かに彼らは真っ赤なスーツが似合う、格好いい大人だった。

「綺麗事に聞こえるかもしれないけど、レースとは他人との競争ではなくて、それぞれが目的意識を持って、自分が理想とする姿との競争なんだよ。それこそチャレンジだと思っ」

と、太田は言う。レースと言え、つい一番速い奴が偉い、となりがちだ。だが、だからといって他人を蹴散らすような傍若無人な走りや態度ではダメだ。「フェアであるべき」それがなにより太田の求める、格好

KEEP ON RACING サーキットミーティング with 出光



8月26日に袖ヶ浦フォレストレースウェイで開催された「KEEP ON RACINGサーキットミーティング with 出光」。一般応募によるドライビングレッスンとスパタイGPなるタイムアタック競技が開催された。今回は座学はなかったものの、初心者向けのプログラムも新設され、フリー走行にスパタイGPを含めたスポーツ走行など、参加者が技量に応じた思いきり走れる内容だった。次回の開催概要・日程はまだ未定だが、本誌GENROOとコラボした開催も予定している。詳細は随時こちらでチェックしてほしい。
<http://sportsdriving.jp>



TRCの加入資格は40歳以上の男女。年齢が満たなくても精神的に大人の心得があるなら加入は可能だ。入会に際しては理事会の承認が必要だが堅苦しいことはない。本文中にある考え方に共感し、サーキットに挑戦したいと思う方はぜひ下記欄外までお問い合わせを。

いい大人、なのである。

とあるメンバーは「クラッシュはおろか、絶対にスピニングもしない。それでどこまで速くなれるか」と自分に課して遂行している。今では雨の日に自然とカウンターを当てて走れるまで成長した。またあるメンバーは62歳で加入した。40年間無事故無違反のカーライフを続け、62歳で念願のサーキットデビューを果たす。最初の目標はレース参戦で、それを叶えたら、次は完走を目指した。その次は周回遅れにならないように、など、毎回自分なりに目標を置いて自分と闘っている。67歳となった今も、真っ赤なアルファ147を駆つ

て元気に走っていた。

こんなことを言うメンバーもいた。仕事でストレスを感じたときに「俺はTRCのメンバーなんだ、がんばろう。乗り越えよう」と自分を奮い立たせるというのだ。趣味のレース活動が結果として人生のモチベーションを上げているのである。

「中学生に言われたことがある。私はプライドというものがよく分らない、と。それで俺は考えた。困難や失敗、挫折に対して、それを乗り越え克服したときの。俺はできる、という自信がプライドにつながるんじゃないかって。子供たちはまだハイドルにぶつかっていないから、プライドが分からないのだろう」

とすればTRCの活動は彼らにとって、チャレンジの連続だ。太田は最後にこんなことも言っていた。

「チャレンジはクセになるんだ。なにかに挑戦して乗り越えた結果が自信につながる。それが結果的にプライドを育てる。そういうスパイラルが日本全体に育って欲しい」

太田哲也のチャレンジは、社会を良い方向に変えること。だからこそ彼の傍にある志は常に、KEEP ON RACING HALL ENGINING FOR LIFE。なのである。